論文の内容の要旨

論文題目　南方熊楠の学問形成

氏名　　松居竜五

和歌山で生まれた南方熊楠（みなかたくまぐす）（1867～1941）は、東京大学予備門を中退後、19 歳から 33 歳までをアメリカと英国での学問研鑽に費やし、もっぱら読書と採集によって独自の学問を築き上げた人物である。ロンドンでは『ネイチャー』、『ノーツ・アンド・クエリーズ』という二つの雑誌への投稿を開始し、生涯に発表した英文論考は 400 篇近くに上った。また大英博物館において 52 冊の「ロンドン抜書」を作成し、これはその後の民俗学・人類学における著作の基礎となった。1900 年に帰国してからは、「南方マンダラ」と呼ばれる独自の世界観を作り上げ、また紀伊半島南部の田辺に定住して研究を続けた。

こうした熊楠の知的探究の過程は、古今東西の文化現象を横断するユニークな学問のあり方として注目されてきたが、没後、長い期間にわたって、主に資料調査の不足から研究が進まなかった。しかし、1970 年代に平凡社版の『南方熊楠全集』全 12 巻が刊行され、鶴見和子が『南方熊楠　地球志向の比較学』（1978）において熊楠の学問を多角的に評価して以降、実証的な研究の気運が高まった。1990 年代以降になると、和歌山県田辺市の旧邸書庫の調査が進み、2006 年に旧邸隣地に南方熊楠顕彰館が開館するなど、関連の一次資料が整備されてきた。

筆者は、修士論文を増補した『南方熊楠　一切智の夢』（以下『一切智の夢』）を 1991 年

に刊行して以来、南方熊楠の研究に携わってきた。この間、科研などのプロジェクトの代表として旧邸調査に従事するとともに、英国およびアメリカなどで海外における関連資料の調査を進めた。本稿は、そうした資料調査の基盤の上に立って南方熊楠の学問形成に焦点を当て、これまでの筆者の研究を全十章にわたって集大成したものである。

まず、第一章「教養の基盤としての東アジア博物学」では、十代前半の熊楠が『和漢三才図会』などの筆写を通じて、東アジア博物学を教養の基盤としていったことに関して跡づけた。和歌山中学時代から東京予備門時代にかけても和漢の博物学書を読みあさった熊楠は、ロンドン時代以降には、そうした記述に含まれるフォークロアに注目し、これを英文論考の中で紹介し続けた。東アジアの伝統的な知識を活用した熊楠の知的好奇心のあり方が、現在の目から見ても注目に値することを論じた。

第二章「西洋科学との出会い」では、和歌山中学に在学中の 13 歳の熊楠が、博物学教員鳥山啓の指導を受けながら作成したと考えられる自作の教科書「動物学」(1880～81)の四つの稿を分析している。これらの草稿には、キュヴィエ、ハクスリーらによって 19 世紀に大きく進展した西洋の生物分類の知識が、最先端のものとして取り入れられている。本稿では、未刊行資料である「動物学」について、その内容の詳細を初めて明らかにできたと考えている。

第三章「進化論と同時代の国際情勢」では、16 歳で上京し、東京大学予備門に入学した熊楠が、知的関心をさまざまな方面に伸ばしていったことを論じている。特に、ダーウィンによって提唱され、モースによって日本に伝えられた進化論との出会いは、熊楠のその後の学問的思考の基礎となった。こうした生物学への関心とともに、東海散士の『佳人之奇遇』(1885)を読んで刺激された国際情勢に対する危機感もあり、熊楠は 19 歳で渡米を決意することになる。本章では、そうした東京時代の熊楠の精神的な成長を分析した。

第四章「アメリカにおける一東洋人として」では、19 歳から 25 歳までの熊楠のアメリカでの生活について、新たな資料に基づいて跡づけた。特に、サンフランシスコでの足跡や、アナーバーでの大学博物館との関わり、ジャクソンヴィルにおける中国人との交友、植物学者カルキンスと文通で協力しながらのフロリダ・キューバでの生物採集など、新たに一次資料を読み込むことで、この時期の熊楠の動向についてこれまで十分に明らかになっていなかった多くの点を解明したと考えている。

第五章「ハーバート・スペンサーと若き日の学問構想」では、アメリカ時代以降の熊楠が、スペンサーから受けた大きな影響を分析した。スペンサーを原書で読み込んだ熊楠は、ロン

ドン時代には多くの英文論考の中でその人類社会の発展に関する理論を応用することになる。また、さまざまな民族集団の特徴を対照しようとするスペンサーの「記述社会学」の試みは、熊楠の大英博物館図書館での「ロンドン抜書」の作成につながったと考えられる。その一方で熊楠は、スペンサーの進化論における演繹的な方法については鋭い批判も投げかけている。この章では、そうしたスペンサーとの葛藤の中で熊楠が得たものについて明らかにした。

第六章「「東洋の星座」と英文論文の発表」では、『一切智の夢』で分析した熊楠の最初の英文論考「東洋の星座」（1893）について再論をおこなった。特に、近年発見された書簡における言及や、ノートの中に見られる下書きを基に、これまで明確でなかった執筆過程とその後の自己評価について詳述した。さらに、当時の英国の新聞に「東洋の星座」や他の熊楠の英文論考が紹介されていることについても、新発見の資料を用いて跡づけた。

第七章の「「ロンドン抜書」の世界」では、熊楠が大英博物館などにおいて 1895 年 4 月から 1900 年 9 月の間に作成した 52 冊のノート「ロンドン抜書」について分析した。筆者が作成した「ロンドン抜書目録」（巻末付録として収録）に基づきながら、熊楠の筆写内容が、長い間かけて西洋で蓄積された世界各地の旅行記を題材としていることや、異文化接触、セクソロジーなどに焦点を当てていることを論じた。この章における考察によって、ロンドン時代以降の熊楠の学問的関心の中核を浮き彫りにすることができたと考えている。

第八章の「フォークロア研究における伝播と独立発生」では、異なる地域における類似の俗信が独立発生によるものか、伝播によるものかという、熊楠の英文論考にしばしば見られるテーマについて考察した。資料からは、熊楠のこうした関心が、同時代の欧米における学問の流れに呼応したものであることが読み取れる。その一方で、フォークロアの生成はさまざまな複合要因を考える必要があり、独立発生か伝播かという単純な二分法で分けきれないという認識に熊楠が向かっていったことを論じた。

第九章の「「南方マンダラ」の形成」では、1893 年 10 月にロンドンで出会った土宜法龍との間で、熊楠がさかんに書簡をやりとりし、その中で真言密教に基づく独自の世界観を示すに至ったことを論じた。近年、熊楠の土宜宛書簡は新たに多くのものが発見され、そのやりとりの全体像に対する理解が変化してきている。この章では、そうした新資料に基づき、熊楠が複雑な因果関係の解明という社会学の意義に関するスペンサーの試みを踏襲しながらも、その演繹的な進化モデルを乗り越えようとしたことを論じた。また、1903 年に交わされた書簡に見られる「南方マンダラ」の解釈についても、資料の多面的な解釈に基づく実

証的な分析を提唱している。

第十章「「十二支考」の誕生」では、1900 年 10 月に帰国した熊楠が、その後ロンドンでの学問的研鑽の成果を日本においてどのように紹介していったかについて論じた。植物採集と哲学的思索に専念した那智での数年間を経て、1904 年末以降田辺に定住した熊楠は、「ロンドン抜書」などでの研究成果を徐々に日本語の著作に著すようになる。柳田国男や高木敏雄とのやりとりを通じてみずからの文体や方法論に関して再検討した上で、熊楠は 1914 年から 1923 年まで、毎年の干支を題材とした「十二支考」を『太陽』に連載した。本章では、こうした日本語著作執筆への道のりと、「腹稿」と呼ばれる独自の構想メモの分析により、熊楠にとっての「十二支考」の意味を考察した。

以上の十章を通じて、本稿では実証的な観点から、熊楠の思想をその形成過程に寄り添うかたちで再現することを第一の目的としている。このため、論述の根拠となる書誌および一次資料については、すべて明確なかたちで示すように心がけた。

こうした作業を通じてわかってきたのは、熊楠の学問形成の最大の特徴は、従来言われてきたような古今東西にわたる量的な膨大さではなく、常に問題の中核、熊楠流に言えば「萃点」に迫ろうとする質的な鋭敏さにあるということである。その知的活動のあり方は、徹底して個人的な探求心に基づくものであるが、それゆえに現在なお、私たちの問題意識に直接に示唆するところが大きい。

熊楠の思想は、資料基盤の整備が進んだ現在でもなお、正当に位置づけられているとは言えない。しかし、その学問形成を実証的な観点から丹念に跡づけていく作業は、熊楠の思想を現在進行形のものとしてよみがえらせることにつながるはずである。